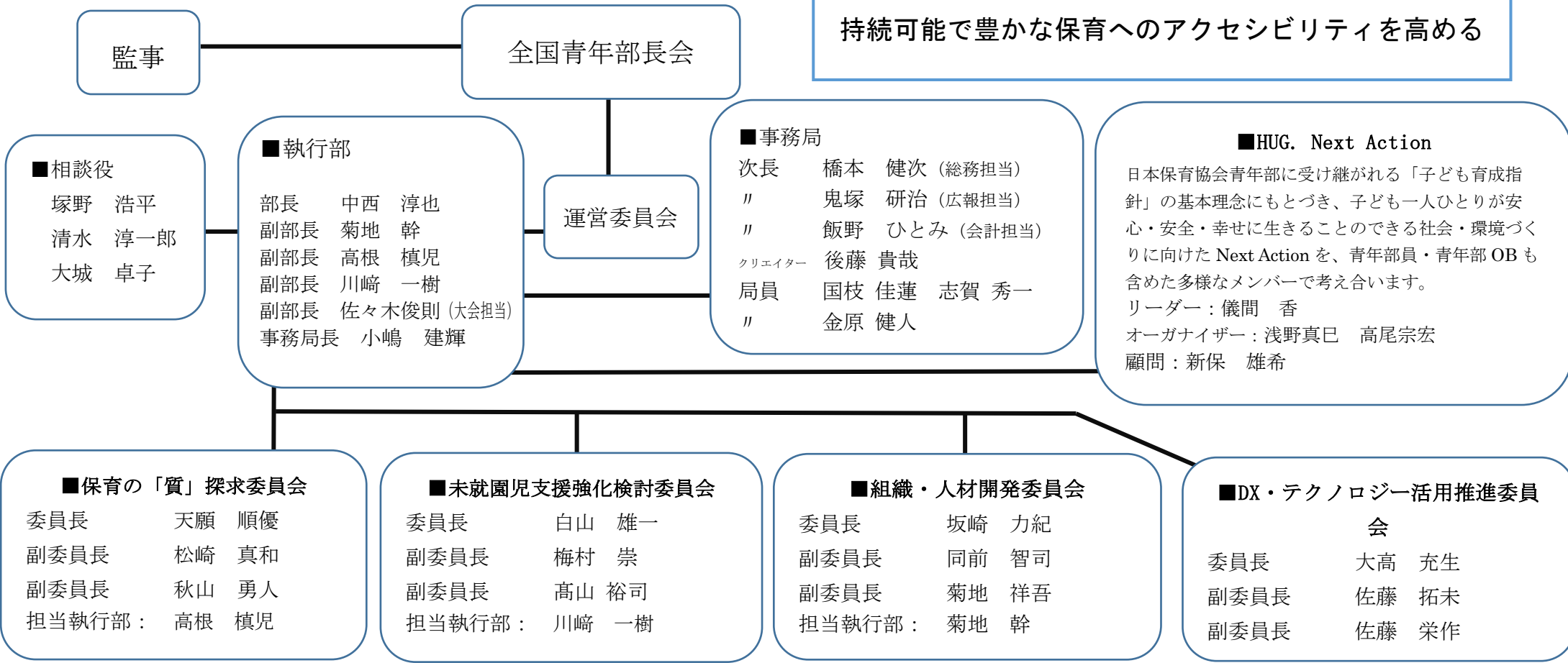


令和7・8年度 組織図

持続可能で豊かな保育へのアクセシビリティを高める



「預ける」から「通う」保育へ

～保育の機能と質が社会にもたらす価値を高める～

各保育施設が持続可能で豊かな保育へアクセスするために、第一に考慮すべき保育の「質」の視点。
地域や園の実情に応じながら、子ども・社会にとって価値の高い保育実践を常に模索し、学び変化し続ける園のあり方を念頭に、実践と研究、双方の視点から保育の質の維持・向上について考え合い、深めます。

未就園のこども・子育て家庭への支援機能を強化することが、持続可能で豊かな保育への可能性を左右する要素の一つになりつつあります。
保育施設に内在する特性や専門性を基盤とした「保育ならではの機能」を磨き生かし、地域の全てのこどもを支援する展開のあり方について、検討を深めます。

園をとりまく情勢は日々激しく変化し、且つ全産業において働き手が不足している状況下において、学卒採用→個のスキル育成を中心として組織の質を維持、強化するモデルは限界を迎えつつあります。
これからは、より多様な人材とともに、互いのらしさや良さを発揮し合う、生産性の高いクリエイティブな組織モデルが必要ではないでしょうか。
組織開発、人材開発、働きやすさ、働きがいなどの視点を交えながら、これからの組織マネジメントのあり方を探求します。

バックオフィスの効率化をはじめ、テクノロジーの活用は今や保育施設にとって欠かせないものになってきています。DX政策の実装も目前に迫り、AI等の活用による新たな可能性を示唆する取り組みや研究も散見されます。
一方、リテラシーの問題など、テクノロジーを保育現場で活用する際の課題や懸念も顕在化しつつあります。
これからの保育現場におけるテクノロジーの有効活用のあり方と課題について、デジタルネイティブ世代の青年部視点で深く掘り下げます。